HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	認識論の自然化と科学［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	麻生, 尚志
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7067号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74071
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Takashi_Aso_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　麻　生　尚　志

審査委員　主査　特任教授　山　田　友　幸
　　副査　准教授　佐　野　勝　彦
　　副査　教　　授　藏　田　伸　雄

学位論文題名
認識論の自然化と科学

・当該研究領域における本論文の研究成果

米国の哲学者クワインが提唱した認識論の自然化は、帰納推論が論理的に妥当でないというヒュームの指摘を真摯に受け止め、科学の総体を外側から基礎づけようとする第一哲学を放棄することにより、翻って帰納に依存する経験科学の成果を認識論において活用することを推奨する立場である。本論文は、この自然主義的な認識論が、仮言的規範の形で認識論的規範を含みうることを確認した後、今日の主要な自然主義的認識論を網羅的に検討し、信頼できるプロセスにより得られた真なる信念が知識であるとみなすゴールドマンのプロセス信頼性主義を最も妥当なものとして選び、この認識論のもとで科学の生み出す成果がどのような認識論上の地位をもつかという問題を詳細に検討している。この問題提起は、国内でも海外でも、自然化された認識論において主に問題にされてきたのが個々人の知識であり、いわゆる「科学的知識」が詳細に論じられることがなかった点で、きわめて意義が大きい。

しかもこの問題を検討したことにより本論文においては、プロセス信頼性主義に修正が必要であることが判明する。自然化された認識論においては、第一哲学たることが断念されたことにより、認識論において科学の成果を援用しても、基礎づけられるべきものを基礎づける理論に持ち込む論点先取にはならない。しかし直接に観察できない対象に関する信念が問題になる場合には、科学理論に基づく推論を信頼できるプロセスに含める必要がある。ゴールドマンによればプロセスが信頼できるのは、高い頻度で真なる信念を生み出すときである。しかし直接観察できない対象にかかわる科学の成果は観測装置の使用に依存しており、観測装置が何を明らかにしているのかの解釈は当該装置の振る舞いに関する理論に依存する。ところが当該理論が信頼できると言うためには、当該理論の生み出す信念が高い頻度で真であるとみなす必要があるが、それには当該理論を参照することが必要になる。この循環は、本論文が科学の成果の地位の問題に自然化された認識論を適用したことにより初めて明らかになった循環であり、この循環の指摘は本論文の重要なオリジナルな貢献である。

さらに本論文では、高い頻度で真なる信念を生み出すという条件に代えて、プロセスが含意する観察可能な予測が高い頻度で的中するという条件を採用するという修正により、この循環が回避できることが示される。この修正を加えたプロセス信頼性主義によれば、理論を援用する推論プロセスは高い頻度で的中する観察可能な予測を生み出すならば信頼でき、信頼できるプロセスの生み出す信念は正当化される。そこで次に問われるのは、そのような正当化された信念が知識であるか否かであるが、帰納推論が論理的に妥当でない以上、帰納に依存する一般法則言明が真であることは、経験により確立されるとは言えず、それらに対応する信念も知識とは言えない。そこで残るのは、例えば陽電子が存在するといった存在言明であるが、これらは直接に帰納に基づくわけではないものの、その導出の際に一般法則が援用されると考えられる。そのためそれらに対応する信念も「正当化された真なる信念」という伝統的な知識の定義に従う限り知識である

とは言えない。しかし、真であることが経験により確立されるとは言えないものの、科学の生み出す信念は、信頼できるプロセスにより生み出されたという形で正当化されているため、占星術や千里眼の生み出す信念とは大きく異なる認識論的地位を持つ。科学理論はこの意味で正当化された信念を生み出す方法として適切に位置づけられるということが本論文の結論である。

・学位授与に関する委員会の所見

自然化された認識論において従来詳しく論じられることがなかった、いわゆる「科学的知識」の認識論上の地位の問題を提起したこと、この問題がプロセス信頼性主義に基づく科学の成果の評価に循環をもたらすことと、その循環を避ける修正が可能であることを指摘したことは、本論文のきわめて重要なオリジナルな貢献である。また、経験科学の成果が「正当化された真なる信念」という伝統的定義に従う限り厳密には知識とは言えないという結論は我々を鼓舞するものではないが、経験科学が占星術や千里眼から区別され、正当化された信念を生み出す信頼できる方法であることが、厳密な検討に基づき確認された点も高く評価できる。口頭試問では、数学や論理学の地位が論じられていないことや、念頭においている科学の例が物理学に偏っているのではないかといった点も指摘されたが、これらの点は本論文の成果を損なうものではなく、今後の研究で本論文の成果をより豊かに肉付けしていくべき論点である。以上の観点から、本審査委員会は全員一致で、本論文提出者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいとの結論に達した。